

芥川龍之介

あとがき

芥川龍之介の生涯は、わずかに三十五年数ヶ月の生涯であった。それは、同年の子規居士の生涯とも（この事を、彼は晩年に書いている）、また若かった啄木、透谷等の生涯とも違っている。自分では「完成」という事を氣にかけた人でもあるが、或意味では最も未完な生涯を残した人でもある。このアルバムを作るにあたり、彼の生涯くらい、最も多くの写真が必要とした作家も少ない。（約千数百枚の写真から、わずかに二百五十枚の写真を選んだのは、最も苦心した。）したがって、このアルバムは、彼の生涯に於て稍詳しく、その文学に就いては、殆んどふれられなかった。しかし、窪川鶴次郎の「作家論」は、その欠を補って、余りあるであろうと思う。唯、編者としては、敢えて一部の反対のあることを覚悟の上で、彼の歿後に伝えられたさまざまな風聞を（彼の遺族の賛同を得て）、これらの写真のなかで、明らかにしようとした。こころみだ。

なお、このアルバムの編纂にあたって、貴重な資料を貸与された方々、写真「大竹氏、レイアウト」内藤氏は勿論のこと、筑摩書房編集部の方、——特に、同編集部原田奈翁雄氏の絶えざる尽力なしには、このアルバムの成りなかつた事を、ここにその名を一々誌さなかつたが他の協力者諸君とともに、この数ヶ月にわたる編集期間中の懐かしい回顧と感謝の意をもって、誌して置きたいと思う。

葛巻義敏

芥川龍之介 日本文学 6
アルバム

定価 200 円

1954 年 12 月 10 日 発行

構成解説 葛巻義敏
撮影 大竹新助
レイアウト 内藤賛

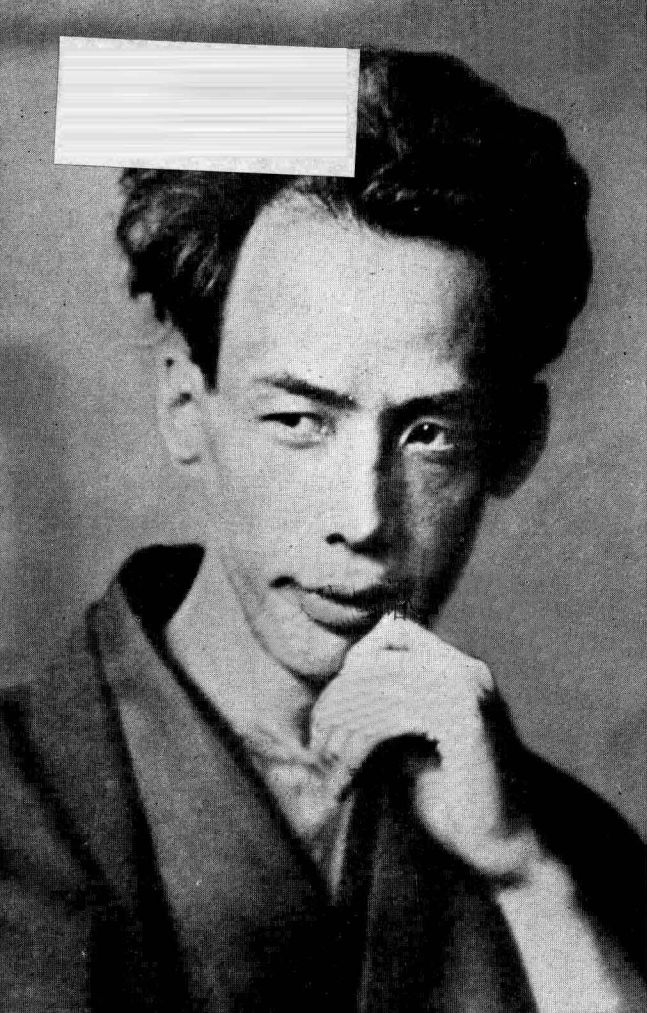
写真印刷 松本精喜堂
写真製版 佐藤製版株式会社
写真植字 東京写真植字株式会社
作家論印刷 三晃印刷株式会社

株式会社

発行所 筑摩書房

東京都千代田区小川町2-8
振替 東京 165768

古鑑製本



昭和2年 新潟高等学校にて

高橋

日本文学アルバム6
筑摩書房刊

「見よ！この崇高な山頂に、一つの新しい石碑が建つてゐる。いくつかの坂を越えて、遠い『時代の旅人』はそこを登るであらう。そして秋の落ちかかる日の光で、人々は石碑の文字を読むであらう。そこには何が書いてあるか？」「見るものは黙し、うなづき、そして皆行き去るだらう。時は移り、風雪は空を飛んでゐる。ああ！だれが文字の腐蝕を防ぎ得るか。山頂の空気は稀薄であり、鳥は樹木にかなしく鳴いてゐる。だが新しき季節は来り、氷は解け、それ、再び人々はその麓を通るだらう。その時、ああだれが山頂の墓碑を見るか。多数の認識の眼を越えて、白く、雪の如く、日に輝やいてゐる一つの義しき存在を。」（萩原朔太郎「芥川龍之介の死」）

遺書の一節

五

あ

ら

や

る

人

々

の

叔

す

ん

こ

と

と

清

の

あ

ら

ゆ

る

人

々

と

叔

す

ん

と

す

る

わ

の

い

中

と

忘

る

る

分

れ



彼の自殺した書齋（田端、当時）

芥川龍之介が、自らその命を絶ったのは、いまから約二十年前、昭和二年（一九二七）の七月二十四日であった。宮本百合子は、その「昭和の十四年間」という文章のなかに、「昭和といふ年は、文学史の最初の頁を、芥川龍之介の自殺によって開いた。」と書いた。また、彼の死後十年くらいして、それは果されなかったが、その死を前にして、魯迅は、「もう少し中国の青年に読ませたい」からと、彼の晩年の作品を紹介、繙訳しようとする意図を抱いたらしい。（増田渉「魯迅の印象」）そしてまた最近、彼らしい人物が出て来る、中野重治の小説「むらぎも」のなかで、その主人公片口安吉は、「葛飾というあの痩せて背の高い人に、全く道理に合はぬ愛情がどつとばかりに湧いてくるのが我ながら安吉として受けとめかねた。」と述べている。——このわずかに三十五年と数ヵ月をしか生きなかったひとりの作家に、——それほど「偉大でも、何んでも」なかった（と、自ら書いている）芥川龍之介に——今もなおかくも多くの人々が、ある関心を寄せ、何か心惹かれるものを、ある愛情を、感じるのには、なぜであろうか。——それを明らかにするために、彼の生涯と彼の書き残した（或いは書き残そうとした）全部のものを明かにしなければならぬ。この解説も、それらの一つとして書かれようとしているのである。



築地入船町附近当時の地図

芥川龍之介は、明治二十五年（一八九二）三月一日、東京築地入船町に生れた。（現在の聖ルカ病院の附近）父新原敏三は、山口県玖珂郡賀美畑村出身の平民。（嘉永三年生）母フクは、江戸に十数代続いた士族芥川氏の女。（万延元年生）いわゆる父四十二歳、母三十三歳の「大厄」の時の子であり、江戸時代からの迷信にしたがい、形式的にもせよ、「捨て児」された。「拾い親」は、父敏三の旧くからの知人、松村浅二郎であつた。辰年辰月（十二月建の第三月）辰日辰刻の生れだったので、「龍之介」と命名された。彼の父は、山口県の平民ではあつたが、明治戊辰の役の際「岩国兵」として出兵し、後、明治八年に箱根仙石原に開かれた耕牧舎牧場に働き、十六年には、前記入船町外人居留地に、牛乳



販売業耕牧舎本店を営んでいた。松村浅二郎は、日暮里支店長であつた。

彼の上には、ハツ、ヒサの二姉があつたが、長姉ハツは、彼の生れる前年（二十四年四月）、突然、脳膜炎のため、七歳で夭折していた。父母の寵愛を、また親戚中の愛情を、最も受





拾い親松村浅二郎



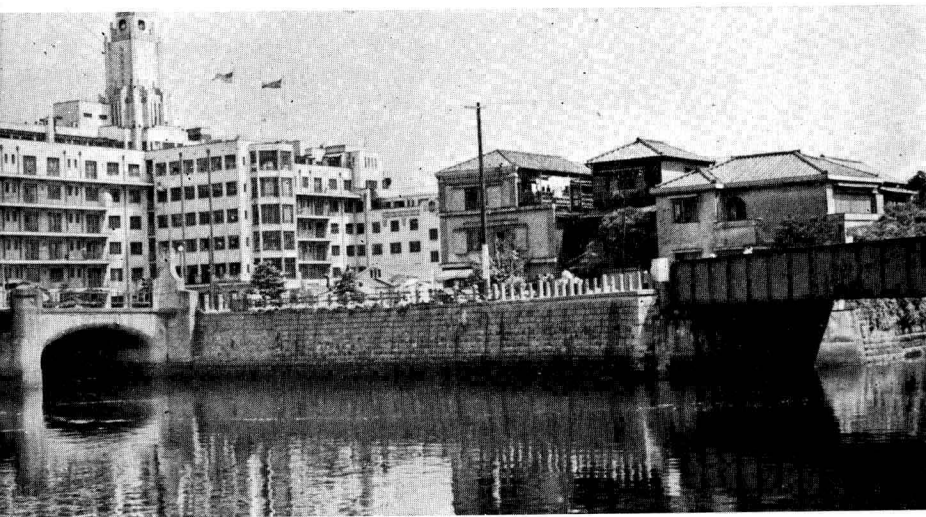
次姉ヒサ



長姉ハツ

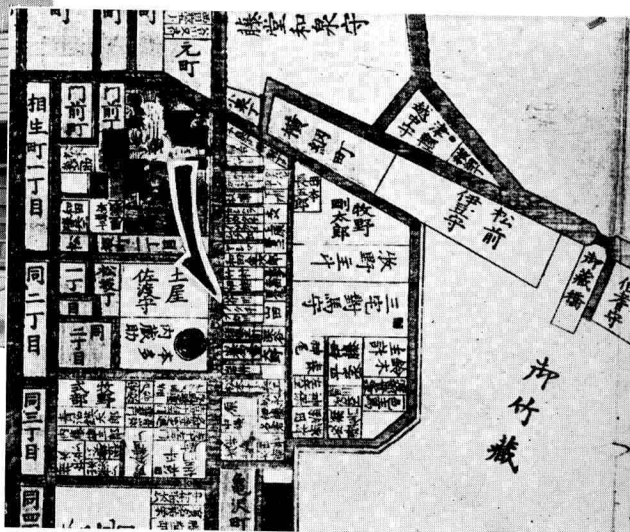
けたのは、この長姉ハツであつた。彼の母フクは、彼の生れた年の十月二十五日、突然発狂し、その後永い「狂人」の生活にはいった。——しかし次姉ヒサの追憶によれば、「気分がよい時には、裁縫を教えてくれたり、正月などには、羽根つきをして遊ばせてくれた母」でもあった。——芥川龍之介の後年の作品「點鬼簿」には、かなりのフィクションがあり、俗伝は、この母の「発狂」を彼の「私生児」説に結びつけようとしている。だが実際には、新しく興る事業家としての実父敏三が、かなりの放蕩をしたらしく、龍之介と同年の「庶子」のあることが伝えられている。

入船町の生家跡 左の建物が聖ロカ病院 右が堺橋





小泉町15番地芥川家跡

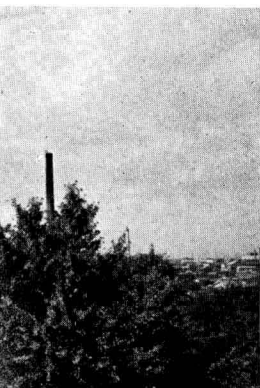


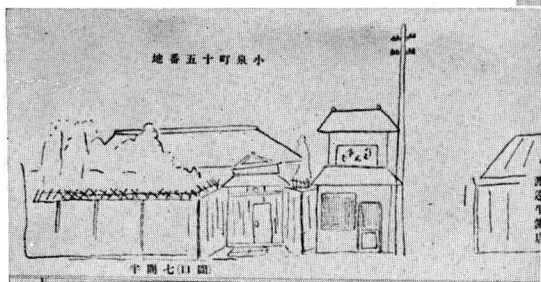
本所小泉町附近（嘉永絵図）

長となり、退職後は小さな銀行等を経営したが失敗した。伯父道章の妻トモ（後の養母）は、幕末の大通細木香きよこぎ以の姪である。――勿論、姻戚関係を結んだ親しい間柄ではあるが、新しく興ろうとする「平民」新原家（実家）と、古い伝統をひそかに誇る「士族」芥川家（養家）との間には、また相互間に微妙

母が発病したため、彼は、生涯を独身で暮した母の直姉である伯母フキ（昭和十二年歿、八十二歳）に引取られ、本所小泉町の伯父（母の長兄）芥川道章のもとで育てられた。この伯母フキは、伯母とはいえ幼時から抱き寝をし、牛乳で龍之介を育てたのであり、本当の「母」にも等しかった。――後に、彼の養父となった伯父道章は、当時東京府の土木課に勤め、後土木課

5 才袴着の当時





小泉町芥川家外景（スケッチ）



養父芥川道章

な感情、軽蔑や反感、「優越」感があつたと思われる。これが既に、いたいけな子供時代から、このような「養家」と「実家」の間に立たされた彼の不幸の始まりではないかと思う。勿論、子供はそれをはっきり意識はしなかったに違いないが——。芥川家は、一家中、一中節を習い、伯母フキはその名取りでもあり、養父道章も、南画、篆刻、雑俳等をたしなみ、他の伯母たちも、絵師狩野勝玉等に嫁いでいるといった江戸趣味の強い家柄であつた。

お竹倉あと（現在震災記念堂）



養母トモ（左）と伯母フキ、その署名



常口口悔しがりました
復習讀書例如

○八月十三日

水練の事で持ちきり
ますが今日自分と吉
田君とは四級生の試
験をうけてまづ
及第しました

うれしまざれに直吉
田君と協會をどび出し
て柳橋へ級章を
買に行きました

○八月二十二日

晴
復習讀書例如
今日水練場で三
級生の試験をし
ましたがその結果
は十中の九箇九分
の八は落第です
○八月二十二日

晴
復習は休んで讀書
と遊戯といふこと

明治37年夏休の日記

彼が、幼少年時代を送ったのは、「本所の同向院の近所だった。

彼の記憶に残ってゐるものに美しい町は一つもなかった。美しい

家も一つもなかった。殊に彼の家のまはりには穴蔵大工だの駄菓子

屋だの古道具屋だのばかりだった。それらの家々に面した道も泥

濘の絶えたことは一度もなかった。おまけに又その道の突き当り

はお竹倉の大溝おおくさだった。南京藻の浮んだ大溝はいつも悪臭を放つ

てゐた。……彼は本郷や日本橋よりも寧ろ寂しい本所を——同向

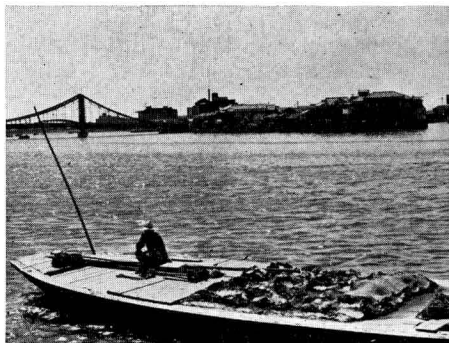
院を、駒止め橋を、横綱を、割り下水を、榛の木馬場を、お竹倉の大

溝を愛した。それは或は愛よりも憐みに近いものだったかも知れ

ないが、憐みだったにせよ、三十年後の今日さえ時々彼の夢に入る

ものは未だにそれらの場処ばかりである。」「(大導寺信輔の半生)

蔵前橋附近 (大川端)



右に中洲を望む



山東京伝一族の墓

鼠小僧次郎吉の



回覧同人雑誌「日の出界」

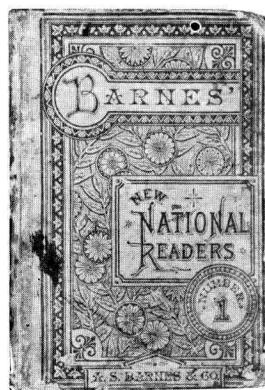
小学校時代

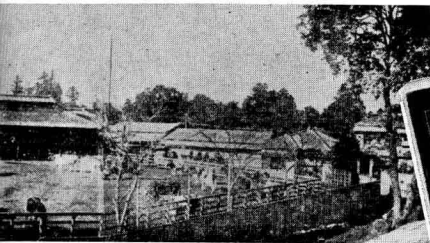


明治三十年、六歳の彼は回向院の隣の江東小学校附属幼稚園に通い、翌三十一年、江東小学校に入学した。同時に、彼がその家で、或いは貸本屋で、或いは図書館で、読んだ本は家に古くからあった草双紙、貸本屋の講釈本全部、「西遊記」「水滸伝」「八大伝」等、或いは蘆花、樗牛、小島烏水、鏡花、漱石、緑雨等であつた。又十一歳の時には、級友たちを集め、彼が中心となつて「日の出界」という回覧同人雑誌を発行、溪水、龍雨などの筆名を用いて文章を書いたりしている。しかし近所の子供達と「回向院の石塔を倒し」たり、大川端で水泳を習つたりしたことも勿論であつた。十一歳の時、実母を失つた。この頃から英語をナシヨナルリイダア、漢文を日本外史から習い始めた。「古い一冊の玉篇の外に漢和辞典を買ふことさへ、やはり『奢侈文弱』だった」と書いているその玉篇も今に残っている。

「日本無双玉篇」

ナシヨナルリイダア





新宿耕牧舎牧場全景



耕牧舎パンフレット

実家の牛乳販売業は時と共に隆盛を加え、東京府下豊多摩郡内藤新宿町に六千坪の牧場を持ち、耕牧舎を号する支店も市内に幾つか設けられるようになっていた。当時、芝新銭座に移っていた実家には彼もたまに遊びに行ったが、実父を「叔父」と呼ばれていたことが明治三十七年夏休の日記に見える。実父は彼を芥川家にあずけはしたものの、亡妻の忘れがたみの、長男に対する愛情は断ち難かったのであろう、屢々彼をとり戻そうと試みたものらしい。

「僕は一夜大森の魚栄でアイスクリームを勧められながら、露骨に実家へ逃げて来いと口説かれたことを覚えてゐる。」しかし彼がこの勧誘に従わなかったのは、「殊に養家の伯母を愛してゐたからだ。」それに、実母フクの発病後、新原家に手伝いに行っていた実母の妹フユが、龍之介八歳の時、敏三との間に一男得二を生んでいたため、彼女の新原家入籍（三十七年九月）を条件に、三十七年八月、芥川家と正式に養子縁組することになった。そのいきさつを伝える裁判判決その他の文書が残っているが、実父側及び公文書では彼の

明治37年夏休の日記

明治三十七年七月二十四日 半晴半曇
晝迄は熱でたづさへきた教科書をひもときました晝過ぎ叔父及姉弟と共に新宿の角力を見物しました夕方方角の車庫でうへに甲虫を御生大事でぶらさげて橋大

七月二十五日 雨後曇
起床五時十分 雨戸起き上りさま

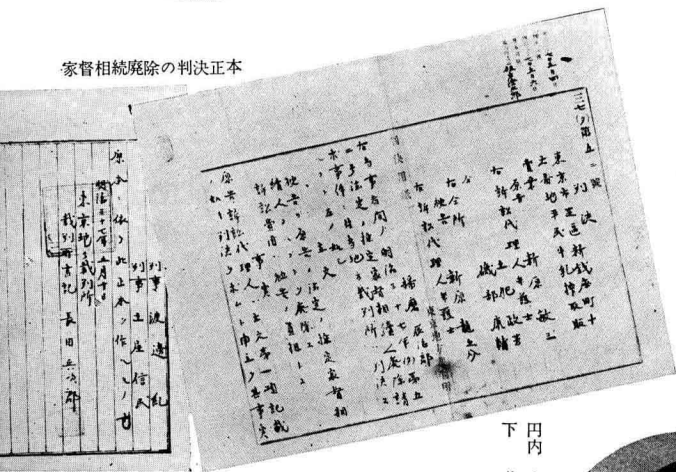
鼓の音に送られ、ふらがう家には（？）あつたのは六時三十分でした寐床七時三十分（頗、早寝す）



異母弟新原得二



家督相続廃除の判決正本



を「龍之介」と書き、養家側及び彼自身は「龍之助」と書いていたのがわかる。故意か偶然か、養家で助と誤用していたのを彼が知ったのも恐らくこの時が最初だったのだろう。

裁判事実申立 実父敏三筆

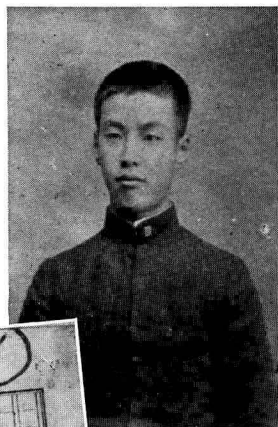


下 円内
実父後妻フエ
養子縁組証書



學友會雜誌 第五號

三十八年、東京府立第三中学校に入学。上級に後藤末雄、久保田万太郎等がいた。彼は

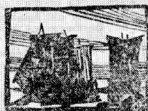


三中時代

いろいろな文章を学友会雑誌等に書いていたが、その最たるものは五年の時の「義仲論」であった。彼は後年の作品に中学時

義仲論

一平氏政府

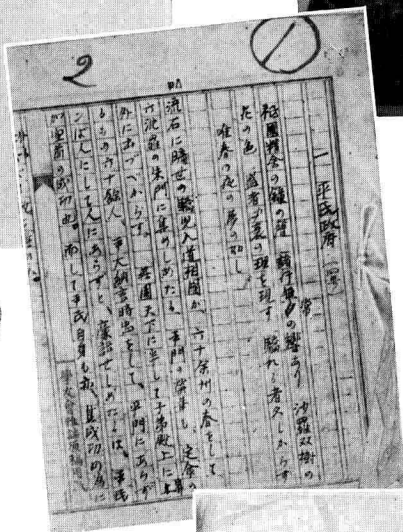


説論

五甲

芥川龍之介

成吉思汗の鐘の聲、諸行無常の響けも、沙羅双樹の花の色、盛れ必衰の理を現る。嗚れも久しからず嗚春の風の夢の如し。
流石に戦世の雄兒人並相國が、六十余州の春を盡し、六波羅の朱門に集めしめたる、平門の豪華も、定命の外に出づべからず。君國天下に半して子弟國上に昇るもの六十餘人、平大納言忠盛を以て、平門にあらざらん人にして人にあらざると、深遠としめたるは、平氏が平家朝の成功也而して平氏自身も亦其成功の爲に作るべき數を盡ひり。



「義仲論」とその原稿



上 槍ヶ嶽紀行
右 学友会雑誌記載

名年成績優等にして勤務ありし者

芥川龍之介
中原英太郎
西川田
依田

中学時代にも回覧同人雑誌をやつていたことがわかる。



明治三十九年 六月二日 編輯
六月三日 發行
發行所 芥川龍之介
印刷所 辰野十五番地
土流星社 發行
（印）

一、本誌は本年より増刊と改題す
二、本誌は毎年三回月と月期せず發行す
三、本誌に關する事務は一切發行所より取扱ふ事
四、本誌は中し込ケ次第早速送らるべし
五、本誌に大ニ投書と歡迎す（但、投書は投書規則より事）
以上

代を描いているが、そこにある「作為」と実際の事実を混同するのは誤りで、寧ろ「成績優等」な彼は「大竹の道場に、柔術の寒稽古」に通ったり、「発火演習」の中隊長をつとめたりする「模範的」な中学生であった。しかしその「義仲論」「日光小品」等に或る情熱と早熟さとは感じられはするが、

それらに徹しきれなかったところに、——彼の言葉に従えば、あらゆるものに「反叛」し得なかったところに、彼の幼時から「境遇」上の不幸があつたのだらうと思われる。たとえ、それが彼の「心の優しさ」と呼ばれるにしろ。なお、ここに誌しておきたい中学の同窓は西川英次郎（現鳥取大教授）と

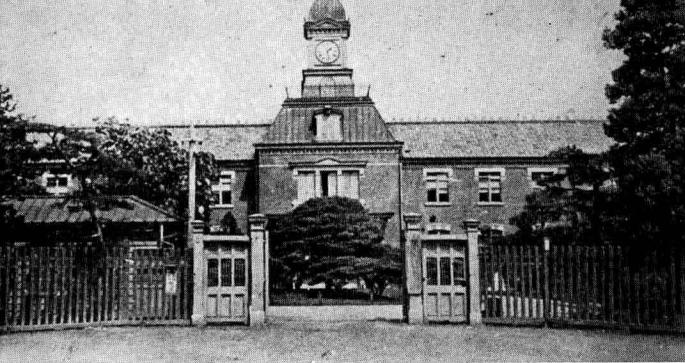
一 高時代の水彩画



一 高入学当時



当時の第一高等学校



平塚逸郎とである。西川については、作品「追憶」の中で、『君は創作をやるつもりなんだから、さう云ふ人間もあると云ふことを知って置いた方が善いかも知れない』というその言葉を引きいている。又平塚逸郎は、小説「彼」の主人公となった人である。

三中进行を卒業した年、無試験で第一高等学校一部乙（英文科）に入り、寮生活も送っている。同級には、後に「新思潮」の同人になった人々もいたが、この頃の彼は、最初佐野文夫と親しみ、後、恒藤恭（旧姓井川）と親交を結んだ。他は、むしろ孤独な生活を送っていたらしい。

并啓今般左記へ轉居致候間
御通知申上候取具

北豊島郡滝野川町字田端
四百三十五番地

大正三年十月

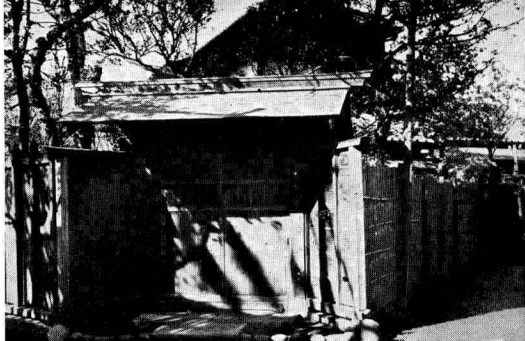
芥川道章
芥川龍之介

右 芥川龍之介の転居通知

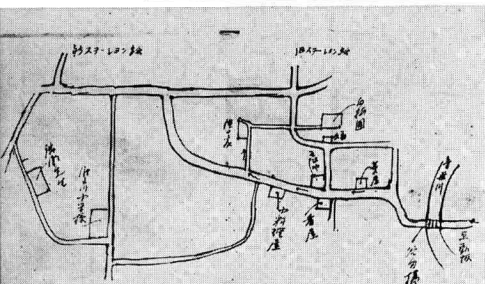
田端への転居通知

原に近い借家の「二階」で、斎藤茂吉の歌集「赤光」の初版を読んだ。後年彼は、もし「赤光」の一巻を読まなかったとすれば「大いなる詩歌の日の光をかい間見ることさへ出来なかったであらう。」（「僻見、斎藤茂吉」と書いている。この時代の彼の読書は、徳川時代の浄瑠璃や小説から、ツルゲネフ、イブセン、モウパッサン、ワイルド、ゴッチェ等に移っていった。

翌大正二年には一高を二番で卒業（一番は恒藤）、東京帝国大学英文科に入った。恒藤は京都大学の法科に去った。三年秋一家は東京滝野川町田端の新居に移った。その頃の田端は、草深い郊外で、「二階へ上ると霧の中に駒込台の燈火が一つづつとむるのが見え」た。



右 田端の家の門
下 田端の家への地図



右 田端二階から本郷台を望む
上 田端の家によく坂道

